

遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

⑭

定着するセビロ型——カンカン帽とスパッツと

大正後期に流行した3つ揃いセビロは、ロンドン新型という。肩幅は広め、裾まわりは狭く、袖のロールはやや長め、ウエストは絞ってあり、丈は短かく、ボタン位置は低い。フロント・カットは大きく丸味を帯びていた。

丈が短かいのは欧州大戦後の流行だった。

大戦後の洋服地の暴騰から来た「必然的」なスタイルだったともいう。このころまではセビロの用尺は3ヤードがふつうだった。生地が高価になるにつれ、これは、2.6ヤードになった。それだけ上衣が短い。

当時の日本人の平均身長はかなり低かったから、これで十分チョッキもとれたらしい。夏服でもキチンとチョッキをつけるのが紳士の常識である。

冬はこれにソフト帽をかぶり、夏はカンカン帽。編み上げ靴にスチッケというものものしい姿が街を歩き交う。

短靴に「スパッツ」をはく「商館ボーイ」も神戸では珍らしくなかった。スパッツとは、ひざからくるぶしまでの足カバー。ボタンで止めるおしゃれ用のイナセなスタイルである。このボタンをはめる道具と靴べらを組合せて売っていた。

明治初期、半マントル3つ揃いといわれたセビロが、ようやく洗練、現代に近い型にな



大正時代作られた2代目柴田音吉のタキシード。彼は肉づきがよく、やや身長は低い。上衣丈は当時の流行でかなり短かい。50年余を経たいまでも型くずれをみせず、入念な手縫いのあとが生形を放っている。生地はメルトン。(撮影昭和50年5月) 和子

ってきたのがこの時期である

× ×

この間約60年、トンビ服、タキシードが出現、半マントルと呼ばれたカッター・アウェイ・コートが園遊会を賑わしたのが明治初年。

その後中期に至り、長マントルと呼ばれるフロックやモーニングも一般化した。インパネス、オーバーコートの出現でやがてフロックは少なくなり、セビロや詰袖の需要が増した。フランス型エンビ服の流行したのが明治後期である。

大正に入りセビロ型が主力

を占め、紳士服の基本スタイルとしての位置を固めていった。

× ×

当時作られた2代目柴田音吉の洋服は、いまだに型くずれを見せていない。袖付け、袖付けその他ほとんどが綿密な手縫い。ボタン穴のかがりひとつにしても「いまこれだけの仕事のできる技術者はいない」とエキスパートは証言する。

一針一針にこめられた職人氣質が60年余経ったいまなお息づき、精気を放つ。

(つづく) 岡 和子記者